

第五講 『紫式部日記』

次の①・②の文章を読んで、後の問に答えよ。

① 和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ、うちとけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉のほひも見えはべるめり。歌はいとをかしきこと。

② ものおぼえ、歌のことわり、まことの歌詠みさまにこそはべらざめれ、口にまかせたることどもに、かならずをかしき一ふしの、目にとまる詠みそへはべり。それだに、人の詠みたらむ歌、難じことわりみたらむは、いでやさまで心は得じ、口にいと歌の詠まるるなめりとぞ、見えたるすぢにはべるかし。はづかしげの歌詠みやとはおぼえはべらず。

② 清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、

真名書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいと足らぬこと多かり。 10

⑤ かく、人にことならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行くすゑうたてのみはべれば、艶になりぬる人は、いとすごうすずるなるをりも、

⑥ もののおはれにすすみ、をかしきことも見すぐさぬほどに、おのづから、

さるまじくあだなるさまにもなるにはべるべし。そのあだになりぬる人の
はて、いかでかはよくはべらむ。

問一 傍線1・2の部分を口語訳せよ。

1 はづかしげの歌詠み

2 うたてのみはべれば

問二 傍線aの部分について、

1 「才」の読みをひらがなで記せ。

2 「そのかたの才」の意味として適切なものを、次のなかから選び出して、その番号を記せ。

① 文章の才能

② 和歌の才能

③ 社交の才能

④ 書道の才能

問三 傍線b「るる」と同じ意味のものを、次のなかから選び出して、その番号を記せ。

① 帝なほめでたく思し召さるることせき止め難し

② 悔ゆれども取り返さるるよはひならねば

③ かくてまた心の解くる夜なく嘆かるるに

④ 民のうれへ国のそこなはるるをも知らず

問四 傍線c「あだなるさま」の意味として適切なものを、次のなかから
選び出して、その番号を記せ。

- ① 敵対するさま
- ② うわついたさま
- ③ 役に立たぬさま
- ④ なまめかしいさま

問五 傍線①～⑥のなかから、筆者が好ましいこととして評価しているも
のを二つ選び出して、その番号を記せ。

問六 和泉式部と清少納言に対する筆者の態度について述べた文として適
切なものを、次のなかから選び出して、その番号を記せ。

- ① 和泉式部の情熱的な生き方を評価し、清少納言の洗練された言語感
覚を評価している。
- ② 和泉式部の素直な歌の詠みぶりを評価し、清少納言の才知を誇る態
度を批判している。
- ③ 和泉式部の歌についての知識不足を批判し、清少納言の繊細な観察
眼を評価している。
- ④ 和泉式部の自由で奔放な歌風を批判し、清少納言の現世重視の考え
方を批判している。

第五講

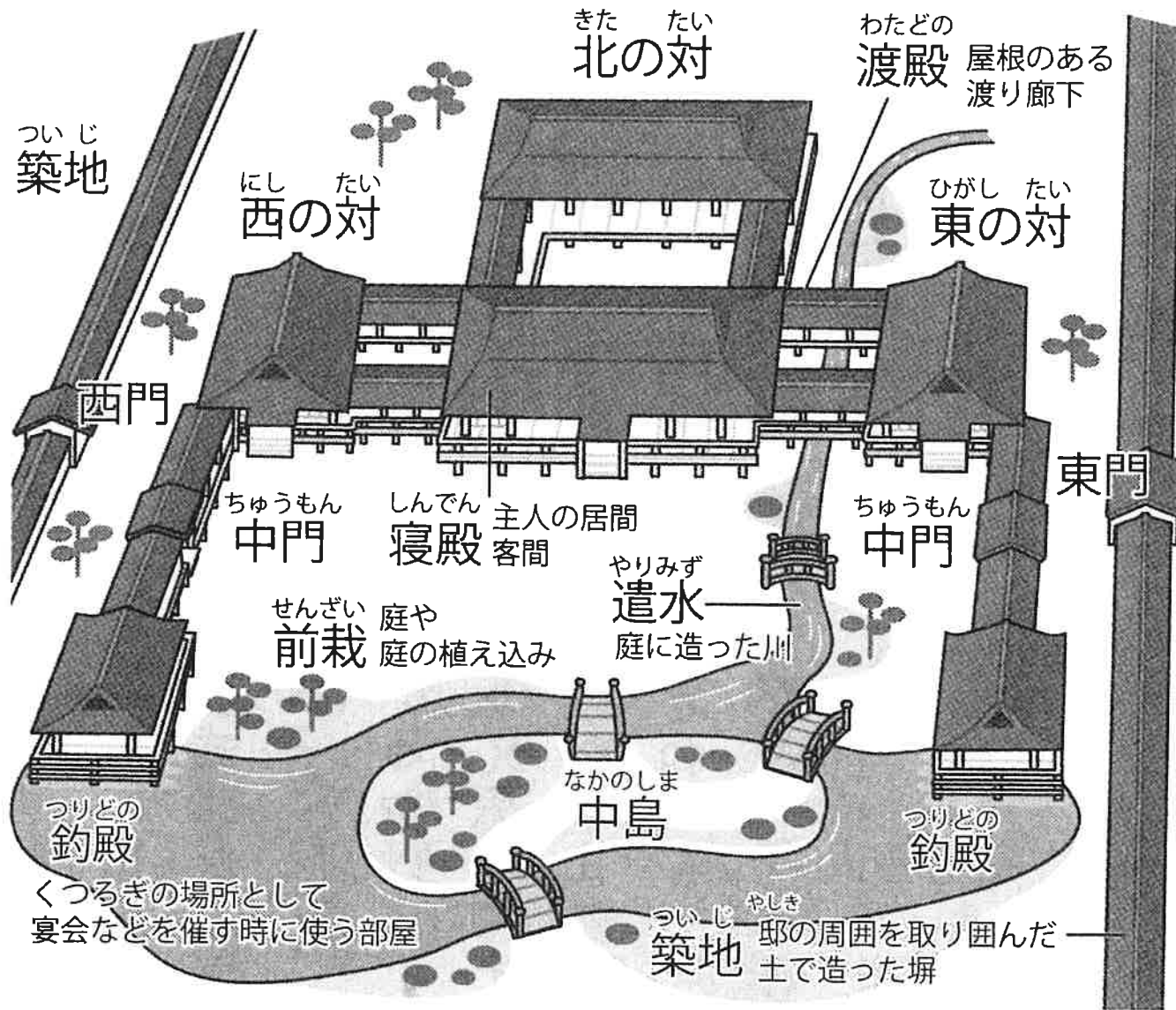
『紫式部日記』（二〇一〇年頃）

作者 紫式部

- ・中宮彰子（上じょう等とう門もん院いん）に仕えた宮廷生活の見聞録。

彰子の土御門殿（道長みちながの邸てい）での初出産、
宮廷の生活や儀式。前半は記録文、後半
は消息文（手紙文）。和泉式部、赤染衛
門（清少納言の人物批判）。

cf. 彰子の父は藤原道長、夫は一条天皇。



・宮中では紫式部と清少納言は会っていない。仕えた年代が違う。清少納言は定子に九九三年から一〇〇一年まで、紫式部は彰子に一〇〇五年から一〇一三年まで、それぞれお仕えした(和泉式部は一〇〇〇九年から彰子に仕える)。ちなみに定子・彰子にお仕えした女房はそれぞれ四〇人くらい。

道隆(兄) — 定子 お仕えした 清少納言

一条天皇

道長(弟) — 彰子 お仕えした 紫式部

清少納言が仕えた中宮定子は、九九〇年に十四歳で入内(宮中に入る、つまり天皇の奥さんになること)するんだ。今だとまだ中学二年生だよな。この時、一条天皇は十一歳(小五)。一方、彰子は九九九年に十二歳(小六)で入内する。この時、一条天皇は二〇歳(二浪〔笑〕)。つまり、定子は彰子より年が十一歳上なんだ。

あはれ
をかし

おもしろし

趣深い

されば (順接)

だから・そういうわけで

←→
されど (逆接)

けれども・しかし

ふみ 【文・書】

① 手紙

② 書物 → 漢籍

③ 学問 → 漢学 → 漢詩文

ざえ 【才】

① 漢学の知識

② 学問

③ 芸能 (書道・和歌・音楽)

①と②をまとめて学識 (漢学)

はかなし

- ① 頼りない
- ② むなしい
- ③ ちよつとした

はかばかし

- ① はつきりしている
- ② しつかりしている

にほふ(動)

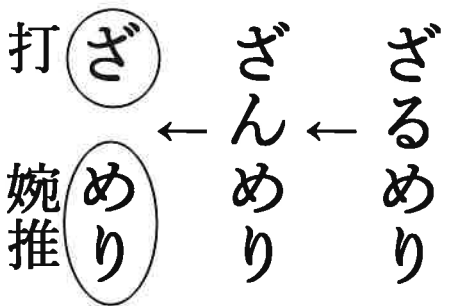
- ① つややかに美しい・照り映える
- ② (木・草・花の色が)染まる・美しく色づく

にほひ(名)

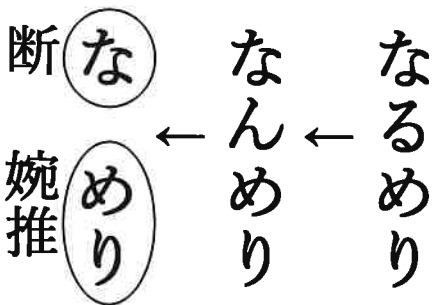
- ① つやのある美しさ・気品
- ② 香り

ことわり【理】

- ① 道理・当然なこと
- ② 理由・わけ
- ③ 判断



文中の「む」は婉曲か仮定
 ———
 む
 ———



はづかし

⊕ (こちらが恥ずかしくなるほど相手が)
 立派だ

① きままりが悪い・恥ずかしい

さばかり

① それほど

② あれほど

副助詞

だに

類推(〜サエ)

軽いものを挙げて重いものを類推する「まして」を探す。
なければ「まして」以下を補ってみる。
ただ入試では「まして」以下を補えという問題は出題
されないから安心してくれ！

・田舎世界の人だに見るものを、

(〓田舎に住む人でさえ見る、へまして都の人なら絶対
見る〓のに)

最小限の願望(セメテ〜ダケデモ)

最小限の願望の意味のときには、「だに」の下に意志・
命令・願望・仮定がくることが非常に多い。

・御文をだに物せさせたまへ命令形

(〓せめて手紙だけでもお書きなさい)

さへ

添加(〜マデモ)↓(Aに加えて)Bマデモ

・空のけしきなどさへ、あやしうそこはかたなくを
かしきを

(〓地上の景色に加えて)空の様子などまでも、どこと
いうこともなく趣深いものを)

助動詞 る・らる

る・らる…(受身・尊敬・自発・可能)↓未然形

に接続

る	れ	れ	る	る	るれ	れよ	受身・尊敬 自発・可能
らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ	

- ① 受身：(〜レル・〜ラレル)
 - ② 尊敬：(〜ナサル・オ〜ニナル)
 - ③ 自発：(ツイツイ・自然ト〜レル)
 - ④ 可能：(〜デキル)
- 自発・可能の命令形はない

ポイント

① 「る」「らる」の上に対象を表す格助詞「に」がある、または「に」を補うことができたら↓受身(「に」の上はほとんど人物)

〜(に)―「る・らる」↓受身

意味上、受身という時もある

〈例〉姑しゅうとめに思はるる嫁の君
受

② 高貴な人物―「る・らる」↓尊敬

○ 「れ給ふ」・「られ給ふ」の「れ」・「られ」は尊敬ではない(受身のことが多い)

〈例〉かの大納言、いづれの船にか乗らるべき

尊

② **人物** — 「る・らる」 ↓ 尊敬

ただし、「我」（一人称）はダメ。

② 謙譲

尊敬

+ 「る・らる」 ↓ 尊敬の 때가
圧倒的に多い。

〈例〉仰せらる・申さる・さぶらはるる

※ 「仰せらる」の「らる」は絶対に尊敬

③ 「る」・「らる」の上に感情・心中を表す動詞があったら、
「る」・「らる」は自発

（自分の）感情・心中 + 「る・らる」 ↓ 自発
（自分の）動作行動 + 「る・らる」 ↓ 自発

〈例〉けふは都のみぞ思ひやらるる

感情・心中 ↓ 自

④ 「る」・「らる」が可能の時は平安時代の文では必ず
下に打消（反語）がくる ↓ 打消の語：「ず・じ・まじ」
（助動詞）・「で」（接続助詞）・「なし」（消え用紙）

— 「る・らる」 + 打消 ↓ 可能

〈例〉おそろしくて寝も寝られず

可打

（「寝も寝られずは慣用表現として覚えておいてもいい。
寝ることができない」）

※ 「る」は四段・ナ変・ラ変の未然形(Ⅱ a 段)に接続し、「らる」はそれ以外の未然形(Ⅱ a 段以外)に接続。

※ 中世(鎌倉、室町)の文では「る・らる」の下に打消がなくとも「る・らる」は可能な時もある。

冬はいかなるところにもすま^可る(徒然草)
(Ⅱ冬はどんなところにも住むことができる)

※ 無生物(生きていないもの)が主語になった時の「る・らる」は原則として受身にならない。

大仏殿^々 建て^々られ^々ける時に
尊
大仏殿が建てられた ×
大仏殿をお建てになった ○

※ 日記では自分以外が主語なら「る・らる」に自発はない。自分が主語の時は自発の時が多い。

《邪道》

- 。入試で「る」「らる」に傍線が引いてあったら自発。
- 。可能・自発どっちかな?と迷ったら自発。
- 。自分以外が主語だったら尊敬。

さかし【賢し】

- ① ① 利口ぶる・小賢しい
- ② ② すぐれている・しっかりしている

来^こし方

- ① 過去
- ② 通り過ぎてきた方

行^きく末・行^きく先

- ① 未来・将来
- ② これから向かう先

うたて

- ① 不快で・いやな感じに
- ② 異様にあやしく・普通でなく
- ③ 嘆かわしく

あてなり【貴なり】

いうなり【優なり】

えんなり【艶なり】

なまめかし

やさし【優し】

優美である

上品である

すごし【凄し】

- ① 気味が悪い・ぞつとする・恐しい
- ② さびしい

すずろなり

そぞろなり

- ① わけもなく
- ② むやみやたらに
- ③ 思いがけない

おのづから

- ① たまたま・万一・ひよつとして
- ② 自然に

「じ」は「む」の打消

>

「まじ」は「べし」の打消

あだなり【徒なり】

あだあだし

① はかない・頼りない

② 浮気である・不誠実である・
浮ついている

③ 役にたたない・つまらない



まめなり

まめまめし

まめやか

① 誠実である・まじめである

② 実用的である

本文通釈

和泉式部は、趣深く手紙のやり取りをしたという人（である）。しかし和泉は（私生活の面では）感心しない面もあります。が、気楽に手紙をすらすらと書き流したときに、その方面（文章、手紙を書く方面）の才能のある人（で）、ちよつとした言葉の（ここは意識して、言葉の中にも）気品（または、つや）が見えるようです。和歌はたいそう趣深いもの（ですよ）。古歌の知識や和歌の道理（ここも意識して、理論）は、本当の歌人という風ではないようですが（ようするに、本当の歌人の詠みぶりではないと言いたい）口にまかせた（意識しよう、まかせて詠んだ）歌の中に、必ず趣のある一点が、目に留まるものが詠み加えてあります。それほど歌を詠む人でさえも、他人の詠んだような歌を、非難したり批判しているような様子は、さあ（詠たいそうすぐれているわけでもない歌人でさえも）、それほどまで和歌の真意は理解していないのであろう、口にまかせて自然にすらすらと歌を詠みだされるようだと、見えている（もう少し意識して、見えるまたは、思われる）性分（または、方面、たち）の人なのですね。こちらが恥ずかしくなるほどのすばらしい歌人だなあとはいません。

清少納言は、（実に）得意そうな顔つきでたいそう（エラそうに）していた人（です）。あれほど利口ぶって、漢字を書き散らしております程度も（ちよつと意識しよう、漢字を自分の書きたい放題に書いております程度も）、よく見ると、まだたいそう足りない点が多くあります。このように他人よりすぐれようと思ひこのんでいる人（または、思いたがる人）は、かならず（時がたつと）見劣りし、将来は悪くなっていくばかりです。（いつも）優美ぶって（または、風流ぶって）それが身につけてしまった人は、まったくさびしくつまらないときでも（または、なんとということがないときでも）、しみじみと感動しているように走り（少し意識する？感動しているように振る舞い）、趣深いことも見過ごさないようにしているうちに（ここは、授業でも言ったように少しむずかしい。ようするに、ものあはれを知っていることを人に見せないと気がすまなくなり、趣のあることを取り上げずにはいられないうちにと言っているんだ。後は、俺が授業中に言ったことを思い出してくれ）自然とそうあつてはならない（常識はずれの）浮ついている（または、軽薄な）態度にもなるのでしよう。その（意識して、そういう）浮ついてしまった人（または、軽薄になつてしまった人）の身の果ては、どうしてよいことがございませうか、いやよいことはいません。

かん だち め
上達部 (1~3位) → [く ぎょう公卿ともいう]

てんじょうびと
殿上人 (4~5位) → [うえ びと上人・うん かく雲客ともいう]

じ げ びと
地下人 (6位以下)

〈ちよつと覚えておこう!〉